九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

貨幣機能論の問題状況 ： 新古典派とマルクス派

福留, 久大
九州大学大学院経済学研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/4360772

出版情報：經濟學研究. 67 (4/5), pp.267-295, 2001-05-31. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

貨幣機能論の問題状況

——新古典派とマルクス派——

福　留　久　大

地域通貨への問題関心
新古典派とマルクス派
新古典派の貨幣機能論（以上、本稿）
マルクスの貨幣機能論（以下、続稿）
宇野学派の貨幣機能論
地域通貨への接近方法

一、地域通貨への問題関心

（1）新古典派の創始者に位置づけられるマーシャル（Alfred Marshall）は、貨幣が社会に対して破壊的作用を及ぼす側面を有することを認めて、こう述べたことがある。「これまでに行われた進歩は、向上する社会秩序の保護の下に、移動の自由、産業活動の自由が増進したことを中心としてもたらされたものである。古くからの伝統の廃絶は、疑いもなく、人民の中の『劣弱な』階級を擁護していた慣習という防壁のあるものを破壊してしまった。その直接的結果には、有害なものも含まれていた。それはしかし、彼らが奴隷ないしは半奴隷状態から解放されるために必要な歩みでもあった。そのための主要な手段は、慣習で表現されていた義務を、貨幣の尺度で表現される価値によって置き換えることであった（Its chief instrument was the substitution of values expressed in terms of money for obligations expressed in terms of custom.）。このように若干の方向においては、貨幣という道具は冷酷に作用した。しかし、それに代替しうるいかなる方法も、人民全体に及ぼすことが出来るようなものとしては、歴史によっては示唆されていないように思われる」[1)]。

貨幣を波頭とする市場経済の奔流は、伝統的な身分制権力構造を掘り崩し、自給経済を多分に残していた共同体的な地域社会を解体する。共同体社会では、社会そのものとその構成員の維持のために必要な財貨と用役との基幹部分は、内部的に自給すべきものとして、慣習的に義務として各々の構成員に割り当てられていた。貨幣は、自給できない必需品を外部社会から購入するときに用いられる副次的存在にとどまっていた。そうした農工一体の生産・消費構造のなかで生存してきた人々が、近代社会への

矢田俊文教授の御還暦を記念して、小稿を捧げる。周知のように、「地域構造」に関する独自の体系化の構築が、教授の御仕事の一部を成している。そのことを念頭に「地域通貨」に関する一論の作成を目指したが、時間的制約のなかで倉皇として執筆せざるを得ず、不完全な形に終わることになった。「地域通貨論」としての総括的論考は、続稿において他日を期すこととしたい。お詫びとともに、お断りの言葉を添える次第である。

1）Alfred Marshall ; ***Money Credit and Commerce,*** 1923, p.264

移行、産業革命の勃興のなかで生まれた商業化社会にあっては、自己の責任で、販売しうる財貨を生産して販売するか、その生産条件に恵まれなければ労働能力そのものを販売して、生産手段や生活物資を購入するための貨幣を獲得しなければならなくなった。外部の市場に何らかの商品を販売できるのでなければ、新時代の経済生活に対応できず、零落を余儀なくされるのである。そういう階層にとって「貨幣という道具は冷酷に作用したのである。」

（2）マーシャルは、確かにこのように貨幣の社会に対する破壊的作用の存在を指摘したのであるが、しかしそれは人々が「奴隷ないしは半奴隷状態から解放されるために必要な歩み」として経過的一時的事象にすぎないという文脈において理解されていた。だが、それから数十年を経て、現行の貨幣制度が社会の経済的必要に適合的でない側面、社会に対する不安定化作用を有することが、時を追って増大する規模で認識されるに至っている。そういう認識の一典型として、ボブ・スワン（シュウマッハー協会）Bob Swann（E.F.Schumacher Society）のそれに着目したい。彼は現行貨幣制度の社会的欠陥の現れとして、次の三点を挙げている。

①「外国為替取引の95％以上は、純粋に投機目的の性格のものであり、世界中で財貨・サービスに対する投資や貿易取引のためのものは、5％以下でしかないこと」。②「ほとんどの国民通貨が大きな変動幅で価値低下の道を進んでおり、そのために諸国間の貿易取引は困難に直面し、あるいはほとんど不可能になっている。いわゆる第一世界の国々さえ、そういうインフレーション圧力（inflation pressures）に苦しんでいる現状があること」。③「私的であるか公的であるかを問わず、債務が指数関数的な比率で増加し続けていること、アメリカ合衆国だけでも債務は16兆ドルに達し、1人あたり6万2千ドルに及んでいること」[2)]。

ここから、現行貨幣制度に代替しうる新しいシステムが現代世界の重要課題として浮上してくるわけであるが、先に見たようにマーシャルは、代替システムの可能性については否定的であった。マーシャルと逆に、現行制度の転換の必要を強調し「現行よりも持続可能な経済成長方式を実現すること、経済システムの中央集権化傾向を低めること」を目標に新しいシステムの導入を主張するのは、L. D. ソロモン（ジョージ・ワシントン大学法学教授）Lewis.D.Solomon（Professor of Law at The George Washington University Law School）である。「地域通貨という代替システムこそが、制度的転換の強力な梃子を象徴するものであり、交換媒介物としての貨幣の創出を、そしてそれを通じて交換過程を民主化し、生態学的に持続可能な方法で人間が生きる力を振るいうる可能性を与えるものである。」「我々の未来の政治的経済的制度を形づくるものは何であろうか。地域通貨制度こそが、生存可能な地域経済の連携網を準備するのである。その実現のためには、然るべき意志と精力さえあればよいのである。地域通貨という観念は、奇妙なものと見えるだろうことを否定はしない。それほどに多くの人々が、貨幣発行の制度にしても、より根本的に生活のあり方や人類の未来についても、現在あるがままのものを当然のものとして受け入れているわけである。多くの人々が、通貨システムであれ、より一般的に政治経済機構であれ、現在あるものは容易には

2) Bob Swann ; Foreword for ***Rethinking Our Centralized Monetary System***

改革できないものと考えているのである。なぜかはわからないが、我々は国民通貨（そして、さらに広くは国民国家）の形成は、進歩を代表するものであり、経済生活の安定を増進するものだと考えがちである。私は、貨幣造出における国民国家に対する特権付与を受け入れることに関して、その必要性をもその有利性をも、疑問に思うのである。私は、『進歩』や『経済的生活』について現在世間にみられるありきたりの観念に挑戦することを目的に、この著書を世に問うのである」。[3)]

こうしてソロモンは、『中央集権的貨幣制度を再考する――地域通貨システムの主張（Rethinking Our Centralized Monetary System—The Case for a System of Local Currencies）』において、中央集権の度合いを強めるアメリカの貨幣と銀行の歴史を振り返り（第２章）、地域通貨発行の原理とそこに内包される可能性を説き（第３章）、実際に試みられている通貨非使用の財貨・サービスの直接交換（barter—the exchange of goods and services）の事例、合衆国ドルにペッグされた地域通貨（local currency pegged to the U. S. dollar）の事例、合衆国ドルにペッグされない地域通貨（local currency not pegged to the U. S. dollar）の事例を経営実務の面にまで及んで調査し（第４，５，６章）、最後に種々の地域通貨の法律的側面――連邦および各州の法律に照らした合法性の有無を検討している。

（３）このような国民通貨と異なる地域通貨の試みは、アメリカ大陸からヨーロッパ、アジア大陸へ急速に広まり、日本においても管見の限りでも二十を超える状況になっている[4)]。多様な地域通貨の共通点は、購買力の通用範囲、通用対象の地域独自の特定にある。地域でこのシステムに参加する人々は自分のできること、持っているもの、自分がして欲しいこと、望むものを登録する、それが出発点である。その登録に基づいて、取引が成立すれば対価として地域通貨が支払われる。支払われる地域通貨はこのシステムが発行して、一定限度まで参加者に提供する。財貨・サービスの供給が重なると黒字になり、財貨・サービスの需要が重なると赤字になるが、それは個々人間の「債権」「債務」ではなく、地域に対する「貸し＝貢献」であり、「借り＝責任」であり、赤字の人は財貨・サービスの供給に工夫を凝らして、相殺に努める。地域通貨には利子は付かず、したがってできるだけ地域内の財貨・サービスを需要することで、地域内の生産・雇用の増進を誘発する効果が期待される[5)]。

3） Lewis.D.Solomon;*Rethinking Our Centralized Monetary System —The Case for a System of Local Currencies,* 1996, p.129, p.2

4） 日本に登場した地域通貨名で直接間接に知り得たものを列挙してみる。①「クリン」北海道栗山町（くりやまエコマネー研究会）②「ガル」北海道苫小牧市（苫小牧の自然を守る会）③「ガバチョ」札幌市（ガバチョマネー研究会）④「キトキト」富山市（富山福祉生協）⑤「高岡ドラー」富山県高岡市（富山エコマネー研究会）⑥「ピーナッツ」千葉市（千葉まちづくりサポートセンター）⑦「ずらあ」長野県駒ヶ根市（駒ヶ根青年会議所）⑧「ハートマネー」長野県南安曇郡（安曇野リング）⑨「福」山梨県北巨摩郡（八ヶ岳大福帳）⑩「ポラン」東京都立川市（賢治の学校）⑪玉田マネー「DEN」東京都玉川田園調布（玉川まちづくりハウス）⑫「リング」神奈川県横須賀市（レインボウリング）⑬「チタ」愛知県半田市（知多ネット・レッツチタ）⑭「おうみ」滋賀県草津市（草津コミュニティ支援センター）⑮「ダガー」松江市（松江まちづくり塾）⑯「だんだん」愛媛県越智郡関前村（グループだんだん）⑰「エンバサ」高知市（高知商工会議所・高知市菜円場商店街）⑱「YUFU」大分県湯府院町（LETSYUFU）⑲「カッパ」福岡県久留米市（筑後川連携倶楽部）⑳「よかよか」福岡市（奈良屋まちづくり協議会・地域通貨実行委員会）㉑「買物スタンプ」東京都世田谷区（烏山駅前通り商店街振興組合）

ソロモンの表現を借りると、地域通貨の目標は、「住民の自発性と地域の自立性を高めて、非膨張的＝定常的経済、生態学的永続性、人間性の向上、より健全な就業状態の実現を奨励する（encourage a greater degree of participation and local self-reliance designed to promote a noninflationary economy of ecological permanence, human development, and fuller employment. ）」ところに求められる。このような地域通貨の特徴を理解するにあたっては、基準として、通常の国民通貨、さらには一般の貨幣の諸機能を改めて俎上にのぼせて、整理された形で把握しておくことが必要になる。ここに、新古典派の経済学およびマルクス経済学の貨幣機能論の状況を観察する契機が生まれるわけである。「新古典派とマルクス派」であって、「新古典派対マルクス派」ではない点を強調したい。含意は、マーシャルであれ、マルクスであれ、彼らが抱いた政治的社会的思想の如何に関わらず、経済学者として如何なる事実を把握したか、如何なる論理を展開したか、それを純粋公平に追跡するということである。

二、新古典派とマルクス派

（1）ここで新古典派とは、次の辞書的表現に含まれる常識的なものを意味する。「新古典学派（neo-classical school）古典派の経済学者の自由主義的な経済観を市場均衡の新しい理論的分析に結びつけて19世紀末から20世紀前半に成立した主流の経済学。源流にあるのは消費者の効用最大化についての限界分析であるが、マーシャル（A.Marshall）やワルラス（M.E.L.Walras）の均衡分析によって発展し、さらにはヒックス（J.R.Hicks）やサミュエルソン（P.A.Samuelson）によって洗練された。個人の合理的行動（観）と均衡論的市場観がその特徴である」。ここで取り上げるのは、具体的には、マーシャル（A.Marshall）、サムエルソン（P.A.Samuelson）、スティグリッツ（Joseph E. Stiglitz）、マンキュウ（Gregory Mankiw）の教科書的叙述である。

（2）マルクス派というときにも、次のような同一の辞書による説明を手がかりとすることが出来る。「マルクス経済学（Marxian political economy）マルクスとエンゲルスによって創造された政治経済学の大系。マルクスの大著『資本論』は彼の膨大な経済学批判体系の一部をなしている。その学説は、労働価値説を基礎とし、商品生産の諸関係を表現する基本的な範疇である商品・価値・貨幣・価格の分析から、資本制生産の諸関係を明らかにする資本・剰余価値・利潤・賃労働などの範疇分析へと展開されている。古典学派など従前の経済学を批判しつつ資本主義社会の経済的運動法則を捉えようとした点が大きな特色」。[6)]

大枠はこの説明で良しとしても、次の三点は修正を加えて明確化を図る必要があろう。①「マルクスとエンゲルスによって創造された政治経済学の大系」。「創造された」というのは誇大表現であろう。ペティ、スミス、リカード、ミルをはじめとして多くの著作家の見解を参照

5）現存の地域通貨の一範型を成すものとして、カナダのLETS（Local Exchange Trading System）を例にした。LETSの機構については、丸山真人「地域通貨論の再検討」『国際学研究』第6号（明治学院論叢464号、1990年）、西部忠「地域通貨LETS・貨幣・信用を超えるメディア」『批評空間』第2期第22号（太田出版、1999年）が簡潔な展望を与えている。

6）『経済辞典（第3版）』有斐閣、1998年、629頁、1147頁。

しつつ、その批判的検討の上に形成されたものであることを考慮すると、「形成された」あるいは「樹立された」という表現がより適切だと思われる。②「マルクスの大著『資本論』は彼の膨大な経済学批判体系の一部をなしている」。「一部をなしている」というのは過小表現であろう。マルクスの経済学的業績における『資本論』の位置の重要性を考慮すれば、「基軸をなしている」ないし「根幹をなしている」と表現すべきだろう。③「古典学派など従前の経済学を批判しつつ」。上の①に関わるが、「批判しつつ」だけでは、古典派に依拠している側面が的確に表現されず、不十分である。「批判的に摂取しつつ」辺りが適当か。

逆に、この辞書の説明で注目すべきだと思われるのは、「マルクス経済学（Marxian political economy）」における日本語および英語表現の適切さである。日本語表現では、「マルクス主義経済学」ではなく「マルクス経済学」が用いられ、英語表現では<Marxist political economy>ではなく<Marxian political economy>が使用されている。「マルクス経済学（Marxian political economy）」に対置して、「マルクス主義経済学（Marxist political economy）」という表現を使用するとき、それぞれにどういう特色があるか。筆者は、関根友彦による次のような区別の説明が適切だと考え、当面その区別に依拠したいと思う。関根は、こう述べている。“Marxian”は「マルクスの知的学問的伝統に属すること“being in the intellectual tradition of Marx”」を意味し、“Marxist”は「マルクスの政治的イデオロギー的伝統に属すること“being in the political and ideolological tradition of Marx”」を意味する[7]。この区別に着目すれば、マルクス経済学は、政治的立場や社会的思想の如何を問わず、スミス経済学やリカード経済学と同様に、マーシャル経済学やサムエルソン経済学と同様に、いかなる人においても学問研究の対象になりうるのである。

（3）サムエルソンは、貨幣論を巡る古典派と新古典派の異同を論じるに際して、17歳から22歳に至る学生時代の教室での思い出から述べ始めたことがある[8]。そのひそみに倣って言えば、筆者が、貨幣機能論に関する「新古典派とマルクス派」の異同を、我が身に大きな困惑を伴いつつ、感じたのは、1963年度、21歳から22歳にかけての時期、金融論と経済原論という二つの経済学部必修講義の受講を通じてである。館龍一郎教授の金融論講義でも、鈴木鴻一郎教授の経済原論講義でも、開講間もない頃に、貨幣機能に関する説明がなされた。両教授の講義は対照的だった。特定の教科書が無くご自分のノートに基づく館教授の説明は、実に簡潔であっさりしていた。貨幣の機能を3行程度板書して、口頭で簡単な説明を加えて終わりだった。他方、鈴木教授の説明は、鈴木鴻一郎編『経済学原理論・上』第2章「貨幣」に基づく深刻なほどに克明なものだった。当時館教授が執筆された著書に「貨幣は一般的交換手段、支払手段ですが、同時に流動性の最も高い資産として『価値の貯蔵手段』でもあります。」という文章を見いだすことができるが、それは同時に教室における説明の骨子でもあった。平明軽快な口調の説明で講義は淡々と進行したが、例えば「交換手段」と「支払手段」とが並列されたままで終わり、それぞれがどういう意味を持ちどの点で

7) Thomas T. Sekine ; ***An Outline of The Dialectic of Capital,*** Vol.1, 1997, p.20

8) Paul A.Samuelson;What Classical and Neo-classical Monetary Theory Really Was(***Canadian Journal of Economics,*** February 1968) pp.1-2

共通するか、どの点で異なるかについて、立ち入った説明がなされることはなかった。同書には、「サミュエルソンの著名な教科書『経済学』は本書の前提であり、われわれは読者が経済学について同書程度の一般的な知識を持っておられることを希望します。[9]」とも記されているが、これもまた教室でしばしば聞くことの出来た口吻でもあった。しかし、サムエルソンの『経済学』は前提にされてはいても、その見解を示す文章が直接的な形で引用されることはなかったように記憶する。他方、鈴木教授の『経済学原理論・上』第2章「貨幣」は、41頁に及ぶ分量の多さで金融論講義の簡潔さと対照的だった。「第1節・価値尺度としての貨幣」「第2節・流通手段としての貨幣」「第3節・貨幣としての貨幣」という3節構成になっていること、さらに第3節が「退蔵貨幣」「支払手段としての貨幣」「世界貨幣」という3項構成になっていることは、組織的緊密性を深く印象づけた。各節、各項ごとにマルクスの『経済学批判』や『資本論』の関連箇所はもちろんのこと、カウツキーやヒルファディングの所説が引用され、批判され、自説との異同が明記されていた。「価値尺度」「流通手段」「貨幣としての貨幣」「支払手段」「世界貨幣」など、日常生活で接する機会の乏しい用語に詳細な説明が付されていた。同書の「はしがき」の冒頭の頁だけで「首尾一貫した論理」という言葉が4回登場しているが、経済原論講義そのものにおいても論理一貫性の追求が強調されていた[10]。サムエルソンは、先の挿話で「本当の意味で、われわれの頭は、二項対立に支配されていて、われわれは精神分裂症患者になっていた」と回想している。筆者の場合、貨幣機能の扱い方の軽重が極めてはっきりしていて、二項対立に陥ることもなく、精神分裂に悩まされることもなかったが、大きな軽重の差、明らかな内容の相異を、鮮明に印象づけられることとなった。

三、新古典派の貨幣機能論

（1）「サムエルソン経済学」ECONOMICS（原著第13版、1989年）において、貨幣機能を説明しているのは第11章「貨幣と商業銀行業」MONEY AND COMMERCIAL BANKINGである。この章は、第1節「貨幣の歴史」HISTORY OF MONEY、第2節「貨幣に対する需要」THE DEMAND FOR MONEY、第3節「銀行業と貨幣供給」BANKING AND THE SUPPLY OF MONEYに分かれているが、第1節の最初の部分「貨幣の進化」THE EVOLUTION OF MONEYの項、第2節の最初の部分「貨幣の機能」MONEY'S FUNCTIONSの項が、貨幣機能の説明に充てられている[11]。前者において貨幣の進化のうちに貨幣機能に言及し、後者においてそれを論理的に整序した形で貨幣機能を説明するという構成である。

（2）「貨幣の進化」THE EVOLUTION OF MONEYの項においては、まず「貨幣の定義」DEFINITION OF MONEYの小項が置かれ、全体の説明を「慎重に貨幣の定義付けを行うことから始める」ということで、次のような形で定義

9）館龍一郎・小宮隆太郎『経済政策の理論』勁草書房、1964年、226頁、3頁。

10）鈴木鴻一郎編『経済学原理論・上』東京大学出版会、1960年、38－78頁。

11）Paul A.Samuelson and William D.Nordhaus;*Economics,* 13th edition,1989, pp.224-255.
都留重人訳『経済学』（岩波書店）、217－248頁。この個所からのサムエルソンに関する引用については、重要個所には英語原文を添えているので、出典の表示は行わない。

付けがなされる。「貨幣とは、広く一般に受け入れられる交換の媒介物つまり支払手段であれば、何でもよい。歴史の初期には貨幣は商品の形をとったが、時が経つにつれて、それは紙幣や小切手勘定の形に進化していった。これらはすべて同じ基本的特質をもっていて、それは、財貨やサービスを購入するさいの支払手段として受け入れられるということにほかならない。」

(Money is anything that serves as a commonly accepted medium of exchange or means of payment. In the earliest days,money took the form of commodities,but over time it evolved into paper currencies and checking accounts. All these have the same essential quality : They are accepted as payment for buying goods and services.)

交換の媒介物の登場については、次のような説明が与えられる。「いったん経済がきわめて原始的な段階をこえて発展するようになると、人びとは一つの財貨を直接に他の財貨と交換することはしない。むしろ、ある財貨を貨幣に対して売り、そのうえで、貨幣を使って希望する財貨を買うのである。一見したところ、これは一つの取引のかわりに二つの取引をすることになるから、事態を単純化するよりも複雑化するように見える。すなわち、もしも私がりんごをもっていて木の実を欲するなら、りんごを貨幣に対して売りその貨幣を使って木の実を買うよりも、りんごと木の実の交換を直接にしたほうが、簡単ではないだろうか。実際には、その逆が真なのであって、二つの取引のほうが一つの取引より簡単である。普通は、りんごを買いたいと思う人は常にあり、また木の実を売りたいと思う人も常にある。しかしあなた自身とちょうど逆の立場の人、すなわち木の実を売ってりんごを買いたいと思う人を見つけることは、めったにない偶然であるだろう。この『欲求の二重の偶然的一致』と呼ばれる事態は、きわめてありそうもないことなのである。…幅広く取引をするような社会では、物々交換（barter）がはらむ圧倒的なハンデキャップを到底克服できなかったために、広く一般に受け容れられる交換手段（medium of exchange）である貨幣が現れてきて、農民は裁縫師からズボンを買い、裁縫師は靴職人から靴を買い、靴職人は農民から革材料を買うことができるようにしたのである。」

(Once economies leave the most rudimentary stages, people do not directly exchange one good for another. Instead, they sell one good for money, and then use money to buy the goods they wish. At first glance this seems to complicate rather than simplify matters, to replace one transaction by two. Thus, if I have apples and want nuts, would it not be simpler to trade one for the other rather than to sell the apples for money and then use the money to buy nuts? Actually, the reverse is true : The two transactions are simpler than one. Ordinarily, there are always people ready to buy apples and always some willing to sell nuts. But it would be an unusual coincidence to find a person with tastes exactly opposite your own, with an eagerness to sell nuts and buy apples. This situation, called the "double coincidence of wants," would be extraordinary unlikely. …Because societies that traded extensively simply could not overcome the overwhelming handicaps of barter, the use of a commonly accepted medium of exchange, money, sprang up to ensure that farmer could buy pants from tailer, who buys shoes from cobbler, who buys leather from farmer.)

交換の媒介物の登場後の貨幣の進化について、サムエルソンは、「商品貨幣」COMMODITY

MONEY、「紙幣」PAPER MONEY、「銀行貨幣」BANNK MONEYの小項目を立てて、説明を試みている。各々の小項目から要点を拾うと、次のようになる。

「交換手段としての貨幣が人類の歴史上に最初に出現したのは、商品の形においてである。非常に多くの物がそれぞれ一度はある時期に貨幣として使われてきた。たとえば牛、オリーブ油、ビールまたはワイン、銅、鉄、金、銀、指輪、ダイヤモンド、巻きたばこなどがそれである。」「19世紀ともなると、商品貨幣はほとんどもっぱら金属に限定されてきた。」「ほとんどの種類の貨幣が、かつてそれ自体の価値なり有用性なりを持つ傾向があった。たとえば金は入れ歯や宝石用に使われてきた。しかし、貨幣それ自体に内在する価値は、現在では、貨幣について一番末節のことであると言ってよい。」「商品貨幣の時代の次に、紙幣の時代が来た。」「最後に、現在は銀行貨幣の時代である。すなわち銀行またはその他の金融機関にある預金を裏付けとして書かれた小切手がそれである。」

(Money as a medium of exchange first came into human history in the form of commodities. A great variety of items have served as money at one time or another: cattle, olive oil, beer or wines, copper, iron, gold, silver, rings, diamonds, and cigarettes.)

(By the nineteenth century, commodity money was almost exclusively limited to metals.) (Most kinds of money tended once to be of some value or use for their own sake. Thus, gold has been used in teeth and jewelry. But the intrinsic value of money is now the least important thing about it.) (The age of commodity money gave way to the age of paper money.) (Finally, today is the age of bank money—checks written on a deposit in a bank or other financial institution.)

サムエルソンの以上のような叙述のなかで、次の四点に注目しておきたい。第一、貨幣登場以前の状況として物々交換（barter）が設定されており、物々交換の不便を克服するために交換の媒介物としての貨幣が出現すると説明されていること。第二、貨幣が商品貨幣（とくに金属貨幣）から紙幣を経て銀行貨幣へと歴史的進化を遂げるという具合に、進歩ないし効率化の観点から説明されていること。第三、貨幣が何よりもまず「交換の媒介物」(medium of exchange) として理解されていること。第四、しかし、「交換の媒介物」という機能の内容について明確な規定が与えられないままに、「支払手段（means of payment)」と言い換えられたり、「財貨やサービスを購入するさいに支払のために受け入れられる（accepted as payment for buying）ということ」が「基本的特質」として指摘されたりしているという具合に、支払手段との異同が明確でないこと。

（3）「貨幣の機能」MONEY'S FUNCTIONSの項においては、表題通りに「貨幣の機能」の説明が与えられるが、「交換の媒介物」(medium of exchange)、「勘定の単位」(unit of account)、「価値の蓄え」(store of value) の順番で各機能について叙述した後、全体を総括する形で要約的規定を行っている。各機能の叙述と要約的規定とは、次のようになっている。

「前に述べたことを復習することになるが、貨幣の機能とは何であろうか。」

「1．取引貨幣の特に最も重要な機能は交換の媒介物として役立つという点である。貨幣がなければ、われわれは、特化と分業が著しく進んでいる近代経済においては絶望的に非能率な制度である物々交換に頼って、交換の相手を絶え

ず探しまわらなければならぬだろう。」

「２．貨幣はまた、勘定の単位として使われる。われわれは、財貨およびサービスの現在ならびに将来の価格をドルで表現する。（ちょうど外国人が、イギリスのポンド、ドイツのマルク、日本の円で、そうするのと同じである。）共通の勘定単位を使うことは、経済生活を大いに単純化する。」

「３．貨幣は時には価値の蓄えとして使われる。株式や不動産や金のような冒険性のある資産との比較で言えば、貨幣は比較的危険を伴わない資産である。」

「貨幣が有用であるのは、それが迅速かつ容易な取引、明白な価格の決定、それに加えて時間の幅の中での価値の蓄えを可能にするからである」

(To review what we said earlier,what are the functions of money?)

(1. By far the most important function of transactions money is to serve as a medium of exchange. Without money we would be constantly roving around in search of someone to barter with,a hopelessly inefficient system in a modern economy with great specialization and division of labor.)

(2. Money is also used as the unit of account. We denominate the prices of goods and services, present and future, in terms of dollars(just as foreigners do in British pounds sterling, German deutsche marks, or Japanese yen). The use of a common unit of account simplifies economic life enormously.)

(3. Money is sometimes used as a store of value. By comparison with risky assets like stocks or real estate or gold, money is a relatively riskless asset.)

(Money is useful because it allows easy and quick transactions, unambiguous determinations of the price, plus storage of value overtime.)

サムエルソンの意図として、各機能の説明と要約的規定の間に、①「交換の媒介物」としての機能が「迅速かつ容易な取引」を可能にする、②「勘定の単位」としての機能が「明白な価格の決定」を可能にする、③「価値の蓄え」としての機能が「時間の幅の中での価値の蓄えを可能にする」――こういう対応関係を設定していることは、容易に読みとれる。さらに、「交換の媒介物」機能との対比において、物々交換（barter）が「絶望的に非能率な制度である」と理解されていることにも注目しておきたい。

（4）「交換の媒介物」(medium of exchange)、「勘定の単位」(unit of account)、「価値の蓄え」(store of value）という用語は、「サムエルソン経済学」の都留重人による日本語訳書における表現を踏襲したものである。しかし、都留自身においても「交換の媒介物」でなく「交換手段」という表現を使用した例もある。また、別添のように「スティグリッツ経済学」や「マンキュウ経済学」のような近年の訳書においては、「交換手段」(medium of exchange)、「計算単位」(unit of account)、「価値貯蔵手段」(store of value）という表現が多用される傾向がある。以下では近年の用法に従うことを主とし、文脈によっては都留的表現を適宜併用することとする。日本語表現における揺れとは対照的に英語表現に関しては不動の定着ぶりが印象的である。

（5）このように「交換手段」(交換の媒介物）機能を中軸として、「計算単位」(勘定の単位)、「価値貯蔵手段」(価値の蓄え）の二つの機能を付け加える形で、サムエルソンは貨幣の機能を理解している。このようなサムエルソンの貨幣機能論は、「サムエルソン経済学」ECONOMICS-An Introductory Analysis初版（1948年）において、基本的に同じ形で登場しており、現行版に

至るまで大きな変化は見られないのである[12)]。

「貨幣の二つの基本的機能を取り上げて貨幣の使用に関するわれわれの分析をまとめることができる。つまり、(1) 交換手段としての機能 (2) 計算の標準単位あるいは価値の共通要素としての機能である。この事項を離れる前に、これらの機能が時間の経過とどういう風に結びついているかについて、指摘しておきたい。最初に、しかし重要度は最小だが、人は富の一部を現金貨幣の形で保持することを選択できる。そういう場合には、貨幣は現在の購買力を将来まで保持する手段である。しかし、通常の時には、人は貯蓄を貯蓄勘定に預金したり、証券や株式に投資して、収益を得られるのだから、貨幣を『価値貯蔵手段』として役立てようとするのは正常とは言えない。しかし、不安定と信頼欠如が行き渡ったような異常な時期、あるいは深刻な金融状態ゆえに投資をしても正の値の利子率を稼げないような異常な時期には、人々は突発的な『流動性』渇望を増加させて、貨幣退蔵を価値貯蔵手段として使用しようと必死になるのである。」

(We may summarize our analysis of the use of money by listing its two essencial functions : (1) as a medium of exchange and (2) as a standard unit of account or common denominator of values. But before leaving the matter, it is well to point out how much each of these functions is tied up with the passage of time. First, and least important, a man may choose to hold part of his wealth in the form of cash. In such a case money is the medium by which present purchasing power is held into the future. But in normal times a man can earn a return on his savings if he put them into a savings account, or invests them in a bond or stock. Thus it is not normal for money to serve as a "store of value." But in abnormal times, when uncertainty and lack of confidence are all pervasive, or when depressed financial conditions prevent most investments from yielding a positive rate of interest, then poeple develop a panickly desire for "liquidity" and try to use hoards of money as such a store of value.)

(6) 以上のようなサムエルソンの貨幣機能論は、次のような二つの理解群に集約されることになる。一つには、貨幣を巡る歴史が物々交換が行われている不便な段階と交換の媒介物（交換手段）としての貨幣の登場によって便益が増進される段階とに二分されたうえで、後者において商品貨幣、紙幣、銀行貨幣の順序で進歩ないし効率化が達成されて現在に至ると理解されていることである。二つには、交換手段（交換の媒介物）機能を中軸として、「計算単位」（勘定の単位）、「価値貯蔵手段」（価値の蓄え）の二つの機能を付け加える形で、三種類の貨幣機能が理解されていることである。

こうした理解の仕方は、教科書を通じて広く普及し、いまや一般的通説として定着するに至っている。「サムエルソン経済学」は20世紀後半期の代表的教科書だったが、20世紀から21世紀にかけての時期に、サムエルソンにとってかわる勢いを示すのは、「スティグリッツ経済学」(ECONOMICS, by Joseph E. Stiglitz, 1993) や「マンキュウ経済学」(PRINCIPLES OF ECONOMICS, by N. Gregory Mankiw, 1998) である。そのスティグリッツやマンキュウにおける貨幣機能の説明が、サムエルソンと同じく物々交換を克服するものとしての貨幣、商品貨幣から紙

12) Paul A.Samuelson, ***Economics-An Introductory Analysis***, 1948, pp.58-59

幣を経て銀行貨幣へと進化するものとしての貨幣という理解に基づいているところ、貨幣機能が「交換手段」（交換の媒介物）を中心として「計算単位」（勘定の単位）、「価値貯蔵手段」（価値の蓄え）を付加した形の三機能から構成されているところに、通説としての定着ぶりを見て取ることができよう。参考のために、スティグリッツとマンキュウの説明から該当部分を以下に引用してみる。

（７）「スティグリッツ経済学」は、第５篇「貨幣の役割」（MONEY'S ROLE）第33章「貨幣、銀行、信用」（MONEY,BANKING,AND CREDIT）を、「貨幣とは貨幣が行うことである」（MONEY IS WHAT MONEY DOES）、「現代経済における金融制度」（THE FINANCIAL SYSTEM IN MODERN ECONOMIES）、「現代経済における貨幣創造」（CREATING MONEY IN MODERN ECONOMIES）、「金融政策の手段」（THE INSTRUMENTS OF MONETARY POLICY）、「米国銀行制度の安定性」（THE STABILITY OF THE U.S. BANKING SYSTEM）の５節に分けている。さらにその冒頭の節が「交換手段としての貨幣」（MONEY AS A MEDIUM OF EXCHANGE）、「価値の貯蔵手段としての貨幣」（MONEY AS A STORE OF VALUE）、「計算単位としての貨幣」（MONEY AS A UNIT OF ACCOUNT）、「貨幣供給の計測」（MEASURING THE MONEY SUPPLY）、「貨幣と信用」（MONEY AND CREDIT）の５項に分かれ、最初の３項が、貨幣機能の説明に充当されている。その説明の要点を抜粋してみる[13]。

「貨幣を用いることなく行われる交換は、物々交換（barter）と呼ばれる。物々交換とは単に、ある財・サービスを他の財・サービスと交換することである。しかし、単純な物々交換が成立するためには、欲求の二重の偶然的一致（double-coincidence of wants）が満たされなければならない。すなわち物々交換の現場において、ある個人は他の人が望んでいる財を持ち、逆に他の人がある個人が望んでいる財を持っていることが条件になる。じゃがいもを持っているヘンリーが靴を欲しがっている一方で、余分に靴を持っているジョシュアはじゃがいもを欲しがっているという場合には、物々交換が行われることによって、二人ともがより幸福になれる。しかし、もしヘンリーが持っている財が薪であり、ジョシュアは薪を必要としていない場合には、ヘンリーとジョシュアは多角的交換を成立させるための相手を探し回らない限りは、靴を入手するための物々交換は非常に困難になる。貨幣は多角的交換を簡単にする方法を提供するものである。貨幣が存在しているならば、ヘンリーは、他の誰かに貨幣と交換で薪を売り、ジョシュアの靴を買うためにその貨幣を使うことができる。現代経済において数十億にも及ぶ交換が行われていることを考えれば、貨幣の便利さはいっそう明らかになるだろう。すなわち貨幣を利用することによって交換が容易になるのである。貨幣が持つこの機能は、貨幣の＜交換手段＞（medium of exchange）機能と呼ばれるものである。」

「歴史的には、様々なものが、交換手段としての機能を果たしてきた。」「様々な時代、様々な文化の下で、様々な財が貨幣として用いられてきた。アメリカ・インディアンの世界では貝殻玉が、また南洋諸島では子安貝が交換手段としての役割を果たしていた。また第二次大戦中の捕虜収容所や現在でも刑務所のなかなどでは、煙草が交換手段の役割を果たしている。」「長い

13）Joseph E. Stiglitz ; ***Economics,*** 1993, pp.880-883

間、主要な交換手段の地位を占めてきたのは、金であった。」「今日では、あらゆる先進国において、政府によって印刷された様々な紙幣が貨幣として用いられている。しかし、ビジネスの取引現場では、現金通貨ではなく、銀行宛に振り出された小切手や、その差引残高が小切手によって支払われるクレジット・カード、また電信によって銀行から銀行へと移される資金が用いられている。」

「人々は購入したい財・サービスと貨幣を後になっても交換できると考えるならば、いま売らなければならない財・サービスを貨幣と交換しようとするだろう。したがって貨幣が交換手段としての役割を果たすためには、少なくとも短期的には、貨幣の価値は維持されなければならない。この機能が貨幣の＜価値の貯蔵手段＞（store of value）機能として知られているものである。」

「貨幣は、交換手段としての役割および価値の貯蔵手段としての役割を果たすとともに、第三の目的、つまり種々の財の相対的な価値を測る手段にも役立っている。これが、貨幣の＜計算単位＞（unit of account）機能である。バナナ１本が25セントで、桃１個が50セントならば、桃１個の価値はバナナ１本の価値の２倍になる。バナナと桃を交換したいと考えている人は、桃１個に対してバナナ２本の比率で取り引きすることができる。こうした場合に貨幣は、相対的な市場価値を測定するうえで、簡単で便利な尺度を提供しているのである。」

(Trade that occurs without money is called barter. Barter involves a simple exchange of one good or service for another. For simple barter to work, however, there must be a double -coincidence of wants. That is, one individual must have what the other wants, and vice versa. Henry has potatoes and wants shoes, Joshua has an extra pair of shoes and wants potatoes; by bartering they can both be made happier. But if Henry has firewood and Joshua does not need any of that, then bartering for his shoes becomes very difficult, unless Henry and Joshua go searching for more people in the hope that they will be able to make a multilateral exchange. Money provides a way to make multilateral exchange much simpler; Henry sells his firewood to someone else for money and uses the money to buy Joshua's shoes. The convenience of money becomes even clearer when one considers the billions of exchanges that take place in a modern economy. The use of money to facilitate exchange is called the medium of exchange function of money.)

(A wide variety of items have served the medium of exchange function.) (Different cultures in different times have used all sorts of items as money. American Indians used wampum, while on some South Sea islands cowrie shells serve as a medium of exchange. In World War II prisoner-of-war camps and in many prisons of today, cigarettes serve as a medium of exchange.) (For a long time, gold was the major medium of exchange.) (Today all the developed countries of the world use pieces of paper for money. These are printed by the government specially for this purpose. However, most business transactions use not currency but checks drawn on banks, credit cards whose balances are paid with checks, or funds wired from one bank to another.)

(People will only be willing to exchange what they have to sell for money if they believe that they can later exchange the money for the goods or services they wish to purchase. Thus, for money to serve its

role as a medium of exchange, it must hold its value, at least for a short while. This function is known as the store of value function of money.)

(In performing its roles as a medium of exchange and a store of value, money serves a third purpose: it is a way of measuring the relative values of different goods. This is the unit of account function of money. If a banana costs 25cents and a peach 50 cents, then a peach is worth twice as much as a banana. A person who wishes to trade bananas for peaches can do so at the rate of two bananas for one peach. Money thus provides a simple and convenient yardstick for measuring relative market values.)

(8)「マンキュウ経済学」は、その第10篇「長期における貨幣と価格」(MONEY AND PRICES IN THE LONG RUN) 第27章「貨幣制度」(THE MONETARY SYSTEM) の導入部分で、次のように物々交換の不便と対比した貨幣使用の便益を強調している。

「取引に貨幣を使う社会的習慣は、規模の大きい複雑な社会において、大変に有益である。その経済のなかに財貨やサービスと交換に広範囲に受け取られるものが存在しなかったという状態を、一瞬間でも想像してほしい。人々は、必要とするものを手に入れるために物々交換——ある財貨あるいはサービスを他の財貨やサービスを交換すること——に頼らざるをえなくなるだろう。例えば料理店で食事を摂るために、料理店主に直接的な価値を持ったものを何か提供しなければならないだろう。皿洗いをするとか、料理店主の車を洗車するとか、家庭秘伝のミートローフ調理法を提供するとか、そういう方法がありうる。物々交換に依存する経済は、稀少な資源を有効に配分するにあたって、困難を抱え込むことになる。そういう経済では、取引は欲求の二重の偶然的一致——二人が各々に他の人が欲しがる財貨やサービスを有しているという起こりそうにない事柄——を必要とすることになる。」

(The social custom of using money for transactions is extraordinary useful in a large,complex society. Imagine,for a moment,that there was no item in the economy widely accepted in exchange for good and services. People would have to rely on barter—the exchange of one good or service for another—to obtain the thing they need. To get your restaurant meal, for instance,you would have to offer the restaurateur something of immediate value. You could offer to wash some dishes,clean his car, or give him your family's secret recipe for meat loaf. An economy that relies on barter will have trouble allocating its scarce resources efficiently. In such an economy, trade is said to require the double coincidence of wants—the unlikely occurrence that two people each have a good or service that the other wants.)

この第27章は「貨幣の意味」(THE MEANING OF MONEY)、「連邦準備制度」(THE FEDERAL RESERVE)、「銀行と貨幣供給」(BANKS AND THE MONEY SUPPLY) の3節に分けられている。その最初の節がさらに「貨幣の機能」(THE FUNCTIONS OF MONEY)、「貨幣の種類」(THE KINDS OF MONEY)、「米国経済における貨幣」(MONEY IN THE U.S. ECONOMY) の3項に分けられ、第一の「貨幣の機能」の項で貨幣機能の説明が与えられている[14]。

「経済の中で貨幣は三つの機能を持っている。

14) N. Gregory Mankiw ; ***Principles of Economics,*** 1998, pp. 591-595

交換手段、計算単位、価値貯蔵手段がそれである。この三つの機能が一緒になって貨幣を他の資産から区別している。」

「交換手段は、買い手が財貨・サービスを購入するときに、売り手に与えるものである。あなたが、衣料品店で1着のシャツを買うとき、その店はあなたにシャツを与え、あなたはその店に貨幣を与える。貨幣の買い手から売り手への受け渡しが、取引を成立させるのである。あなたが店に歩み入るとき、その店で売っているものと交換に貨幣を受け取るに違いないことをあなたは確信している、なぜなら貨幣は共通に受け取られる交換手段だから。」

「計算単位は、人々が価格を掲示したり負債を記帳したりするために使用する基準である。あなたが買い物をするとき、1着のシャツが20ドルであるとか、1個のハンバーガーが2ドルであるとかに気づくことでしょう。1着のシャツの価格は10個のハンバーガーであり、1個のハンバーガーの価格は1/10着のシャツであるという言い方が、たとえいかに正確であっても、価格は決してそういう風には表現されないのである。我々が経済的価値を計測し記録したいときには、われわれは計算単位としての貨幣を使用するのである。」

「価値の貯蔵手段は、人々が購買力を現在から将来に受け渡すために使用できるものである。今日ある売り手が、財貨・サービスと交換に貨幣を受け取るならば、その売り手は貨幣を保有していて、将来のある日に別の財貨・サービスの買い手となることができる。」

「経済学者は、資産がその経済の交換手段に転換されるときの容易さを表すものとして流動性という用語を使用する。貨幣がその経済の交換手段であるところから、貨幣が最も流動的に利用できる資産となる。」

(Money has three functions in the economy:It is a medium of exchange,a unit of account,and a store of value.These three functions together distinguish money from other assets.)

(A medium of exchange is an item that buyers give to sellers when they purchase goods and services. When you buy a shirt at a clothing store, the store gives you the shirt,and you give the store your money.This transfer of money from buyer to seller allows the transaction to take place. When you walk into into a store, you are confident that the store will accept your money for the items it is selling because money is the commonly accepted medium of exchange.)

(A unit of account is the yardstick people use to post prices and record debts.When you go shopping, you might observe that a shirt costs $20 and a hamburger costs $2. Even though it would be accurate to say that the price of a shirt is 10 hamburgers and the price of hamburger is 1/10 of a shirt, prices are never quoted in this way.When we want to measure and record economic value, we use money as the unit of account.)

(A store of value is an item that people can use to transfer purchasing power from the present to the future. When a seller accepts money today in exchange for a good or service, that seller hold the money and become a buyer of another good and service at another time.)

(Economists use the term liquidity to describe the ease with which an asset can be converted into the economy's medium of exchange. Because money is the economy's medium of exchange , it is the most liquid asset available.)

第二の「貨幣の種類」の項では、「内在的価値をもつ商品貨幣」と「内在的価値をもたない法定不換紙幣」との二種類が挙げられ、前者から後者への移行が示唆される。

「貨幣が内在的価値をもつ商品の形態を取るとき、それは商品貨幣と呼ばれる。内在的価値という言葉は、その財が貨幣として使用されないときでも価値を有していることを意味する。商品貨幣の一例は、金である。金は内在的価値をもっていて、工業において、あるいは宝石製造において使用されるのである。現在では金はもはや貨幣としては使用されないけれど、歴史的には金が貨幣の通常の形態だったのである。」「商品貨幣の他の例としては、煙草が挙げられる。第二次大戦中の捕虜収容所では、捕虜たちは、価値貯蔵手段、計算単位、そして交換手段としての煙草を使って、財貨やサービスの相互間取引を行っていた。」「内在的価値をもたない貨幣は、フィアット・マネー（法定不換紙幣）と呼ばれる。フィアットとは単純には命令ないし法令であり、法定不換紙幣は政府の法令によって貨幣として確立するのである。」

(When money takes the form of a commodity with intrinsic value, it is called commodity money. The term intrinsic value means that the item would have value even if it were not used as money. One example of commodity money is gold. Gold has intrinsic value because it is used in industry and in the making of jewelry. Although today we no longer use gold as money, historically gold has been a common form of money.) (Another example of commodity money is cigarettes. In prisoner-of-war camps during World War II, prisoners traded goods and services with one another using cigarettes as the store of value, unit of account, and medium of exchange.) (Money without intrinsic value is called fiat money. A fiat is simply an order or decree, and fiat money is established as money by government decree.)

サムエルソンとスティグリッツが、「商品貨幣」(commodity money) に対して「紙幣」(paper money) という用語を対比的に用いるとき、マンキュウは、「商品貨幣」に対して「法定不換紙幣」を対比させている。また以上の引用の限りでは、マンキュウにおいては、前者から後者への歴史的推移という理解が存在するか否か、必ずしも明確ではないが、別の文献では、「このようにして、商品貨幣の制度から法定不換紙幣 (fiat money) の制度へと徐々に変遷してきたのである」(Thus, the system of commodity money gradually turns into a system of fiat money.) という具合に、明確に歴史的変化として把握されていることが判明する[15]。こうしてみると、マンキュウにおいても、「紙幣」に代えて「法定不換紙幣」を使用しているという語彙上の差異は存在するが、貨幣の進化を巡る理解に本質的な違いを生じさせているわけではない、と言ってよいだろう。

（9）以上において、サムエルソンを中心として、スティグリッツ、マンキュウの貨幣機能に関する叙述を辿ってきたわけであるが、ここでサムエルソンの叙述に戻って、以下においては、その内容に多少とも立ち入った検討を試みてみたい。その際、サムエルソン等の新古典派の貨幣機能論が、二つの部分から構成されることに着目する。一つには、物々交換の一般的存在、その不便を克服する制度としての貨幣の登

15) N. G. Mankiw ; ***Macroeconomics***, 1992, p.144.『マンキュウ　マクロ経済学 I』東洋経済新報社、1996年、111頁。

場、商品貨幣から紙幣を経て銀行貨幣への進化という形で、単線的な経済の進歩ないし効率化を達成する手段として貨幣を説明する部分である。貨幣の歴史的変遷を通じて貨幣機能を解明する部分と言ってよい。二つには、「交換手段」（交換の媒介物）機能を中軸として、「計算単位」（勘定の単位）、「価値貯蔵手段」（価値の蓄え）の二つの機能を付け加える形で、三種類の貨幣機能を説明する部分である。貨幣の力学的構造を通じて貨幣機能を解明する部分と言えよう。ここでの批判的分析の試みも、その二つの構成部分に即した形で、かつ、サムエルソンに新古典派を代表させる形で、行いたい。まずは、サムエルソンの物々交換論、金属貨幣から紙幣を経て銀行貨幣へという貨幣進化論を取り上げて、それら広義の貨幣機能論を検討の対象にする。次に、交換手段（交換の媒介物）機能を中軸として、計算単位（勘定の単位）、価値貯蔵手段（価値の蓄え）の二つの機能を付け加えた三種類の貨幣機能それぞれに関するサムエルソンの説明、いわば狭義の貨幣機能論について検討を加える。

(10) 新古典派物々交換論の弱点、その一。

ここで物々交換と呼ぶものは、サムエルソンによって「一つの財を直接に他の財と交換する（directly exchange one good for another）こと」と説明されているが、何にも増して注意を要するのは、「物々交換」と名付けられるものには、歴史的地理的に特殊の刻印を帯びた共同体内あるいは共同体間において共同体的慣習秩序の下に行われるもので、その特質の解明にはまた特別の手続を要すると考えられるものと、ここで検討対象とするサムエルソンの「物々交換」のように（単純に「りんごをもっていて木の実を欲する」人が「ちょうど逆の立場の人、すなわち木の実を売ってりんごを買いたいと思う人を見つける」ことと表現されているところから判断されるように）共同体に関わるものではなく、独立の私的所有者間で行われると想定されるものと、この二種類が区別されねばならないということである。

人類学の革新者・マリノフスキー（Malinowski）は、西太平洋におけるクラ交易を報告する際に、共同体に関わる物々交換と経済学の教科書類で記載される物々交換との区別について傾聴すべき指摘を行っている[16]。「クラは、部族間に広範に行われる交換の一形式である。それは、閉じた環をなす島々の大きな圏内に住む、多くの共同体の間で行われる」のであるが、「赤い貝の首飾りと白い貝の腕輪－この二つの品物を儀式的に交換するのがクラの主要な基本的な面である」。この部族間交換においては、次のように極めて顕著な物々交換の規則性が見られるのである。「クラは不安定な、内密の交換形式ではない。全く逆で、神話に根ざし、伝統的な法に支えられ呪術的な儀礼にとりかこまれたものである。その主要な取引は、全て儀式をともない、公的な性格をもち、一定の規則によって行われる。それは偶発的に行われるものではなく、まえもって決められた日に、規則的に行われ、決められた約束の場所に向かう一定の交易ルートにそって行われる。社会学的に見れば言語、文化、そしておそらく人種さえもちがう部族の間で取り引きされるのではあるけれども、クラは一定の不変の状況をふまえて、何千という人々

16) Bronislaw Malinowski ; ***Argonauts of Western Pacific,*** 1922, p.81, p.83, p.86, p85　マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』寺田和夫・増田義郎訳、1967年、中央公論社「世界の名著・59巻」146頁、148頁、150頁、151頁。

を二人ずつ組ませ、共同関係にまとめ上げることを基本として行われる。」

このような規則性に富む共同体的慣習に基づく交換に対して、経済学者は概して無理解である。経済学の教科書類においては、真相と異なった形で架空の不規則性が強調されると、マリノフスキーは慨嘆するのである。「天下りの通念によると、原始的交換は、欠乏必要にうながされて、儀式も秩序もなく、有用なあるいは不可欠の品物の交換を、不規則かつ間欠的に行うことであるとされる。この見方にしたがえば、だれもが損をしないように警戒しながら直接的に物々交換をするか、もし野蛮人が極めて臆病で相互の信頼がなく直接接触できない場合には、重い罰則を定め課せられた義務が履行されるようにある種の慣習的とりきめをするか、そのいずれかの仕方で交易が行われるということになっている。」「『通念』というのは、教科書とか、不用意に吐かれることばのなかにみられる見解を意味し、経済学や民族学の文献でちょくちょくみかけることがある。」

以上のように、貨幣使用経済以前から実施されてきた物々交換は、決して偶発的・不規則的なものではなく、整然とした秩序と規則性によって特徴づけられるものである。サムエルソンの物々交換論は、このような事情に無自覚ではないだろうか。サムエルソンの物々交換論は、ここでマリノフスキーのいう「通念」に安易に依拠して構成されているのではないか。サムエルソンは、物々交換の成立に必要な「欲求の二重の一致」と呼ばれる事態は極めてありそうもないことなので、物々交換は「絶望的に非能率な制度（a hopelessly inefficient system）である」と否定的に評価するばかりで、物々交換の特質に目を注ぐことをしないのである。このとき、商品経済的「通念」に支配されたサムエルソンのいう「欲求」とは、経済的欲求であるが、マリノフスキーがクラ交易に関連して強調するのは、共同体成員間の連帯を、あるいは共同体間の絆を、強固に維持したいという非経済的欲求である。したがって、首飾りや腕輪などのクラ用品は、経済生活上の欠乏を満足させたいという「欲求」には応え得ないにしても、南海の島人の連帯を深め絆を強めたいという「欲求」には十分に応えうるのである。その点で、マリノフスキーのクラ用品に関する次のような描写は幾重にも玩味する必要がある。「醜く、ものの役にも立たず、現代の標準からすれば無価値であっても、それが歴史の舞台の上で輝き、歴史的人物の手を経て伝えられ、大切な歴史上の思い出を無尽蔵に封じ込めた容器である限り、それはわれわれにとって貴重なわけである。歴史的感傷は、過去の出来事を研究する一般的関心のなかで、実際大きな役割をもつのであるが、それは南海の島々にも存在するのである。真にすぐれたクラ用品は、固有の名前をもち、それを巡って原住民の伝統に根ざした歴史物語と英雄伝説が生まれているのである」。こうした非市場的要素に色濃く覆われた共同体に関わる物々交換においては、「欲求の二重の一致」が秩序づけられているのである。

ニーハンス（Jurgen Niehans）は、その『貨幣の理論』（The Theory of Money）において、サムエルソンと同様に、物々交換の不便と貨幣使用の便益を、次のように強調している。「（交換手段の使用の）利益は、貨幣的交換を物々交換と比べるときに現れる。古典派や新古典派の経済学者は、腹の空いた呉服屋と寒さに震えるパン屋の事例を引いて、物々交換が成立するためには『欲求の二重の偶然的一致』が必要なこ

と、またそれが社会的分業を狭い範囲に制限することについて、極めて生き生きとした叙述を与えている。貨幣の使用は、この欲求の二重の偶然的一致の足枷から交換を解放することで、経済的厚生を高めることになる」[17]。しかし、共同体社会に関わる物々交換は、「欲求」にしろ、「分業」にしろ、「厚生」にしろ、経済的なものを超えて、非経済的領域に及ぶ多様な（したがって貨幣使用の場合のそれと異質な）「欲求」「分業」「厚生」を含みうるとすれば、貨幣使用の場合との量的大小の比較は、単純には行えないことになる。上に引いたマリノフスキーの事例は、そういうことをも示唆するに違いない。

（11）新古典派物々交換論の弱点、その二。

共同体に関わる物々交換と、共同体に関わることなく独立の私的所有者間で行われる物々交換と、この二者の区別に盲目的なサムエルソンは、南海の島々における眼前に貨幣が登場しない形の取引をすべて物々交換と錯覚する過ちを犯すことになる。マリノフスキーのいう「天下りの通念」に支配されて、議論の前提となる経済状況とその場面での経済行動主体について、精確に認識する努力を怠ることになるのであろう。

サムエルソンは、「スタンリー・ジェヴォンズ（Stanley Jevons）は、初期の貨幣論教科書の中で、人類の文明が物々交換から貨幣使用経済へと移ったときの画期的な飛躍を説明しようとして、次のような経験談を引用したが、それはまさに適切な具体例であった（he could not do better than to quote experiences like the following.）」と賞賛して、その経験談を再録している。

「もう何年も前のことになるが、パリのテアトル・リリークの歌手ゼリー嬢が、ソサイエティ島で演奏会に出演した。ノルマからの一曲（an air from Norma）やその他数曲を歌う代償として、彼女は、演奏会売上代金の3分の1を受け取ることになっていた。その彼女の分け前を計算してみたところが、3頭の豚、23羽の七面鳥、44羽の鶏、5000個のココナッツのほか、かなりの量のバナナ、レモンおよびオレンジということになった。パリだったら、これだけの分量の家畜や果物は4000フランほどに相当するわけで、そうであれば5曲程度を歌う報酬としては十分のものと言ってよい。しかし、ソサイエティ島では現金貨幣が稀少だったのだ。そしてゼリー嬢は受け取った報酬を自分では大して消費することができなかったので、結局はその間、果物を家畜類の飼料にせざるをえなかったのである」。経験談を再録した後、サムエルソンはこう締めくくる。「この例が物々交換の性質を示している。物々交換は、財貨を他の財貨と交換する内容の事柄であって、財貨を広く一般に受け入れられる交換手段、すなわち貨幣に対して交換するのではない。（This example shows the nature of barter. Barter consists of the exchange of goods for other goods,rather than the exchange of goods for a commonly accepted medium of exchange, or money.）」

ジェヴォンズが『貨幣と交換機構（Money and Mechanism of Exchange）』[18] に採録したソサイエティ島の経験談は、サムエルソンのみならず、ニーハンス『貨幣の理論（The Theory of Money）』[17] も物々交換の好例として提示しているものである。しかし交換当事者・経済行動主体に即して冷静に前記の経験談を読む読者には、これほど

17）Jurgen Niehans ; ***The Theory of Money,*** 1978, p.2

18）Stanley Jevons ; ***Money and Mechanism of Exchange,*** 1875, pp.1-2

場面設定・行動主体想定が不明確で説明力を欠く例も珍しいと思われるに違いない。

ジェヴォンズにしろ、サムエルソンにしろ、ニーハンスにしろ、豚や鶏やバナナやオレンジを持参する島民と歌手ゼリー嬢の間で、家畜や果物と歌曲とが物々交換されると考えているのであろう。しかし、交換当事者・経済行動主体に即して考えるならば、そういう交換があり得ないことが、容易に察知され得るはずである。参加した島民の一人一人からゼリー嬢が家畜や果物を直接受け取り、会場が一杯になった後でゼリー嬢が舞台に立って歌い始めたのであれば、確かに物々交換がなされたと言えよう。しかし、そういうことはあり得ない。それでは、果物はまだしも舞台裏の控え室にでも積んでおけるとしても、駆け回る豚や飛び跳ねる鶏はゼリー嬢の手に負えるものでは無く、彼女は歌どころの騒ぎではあるまい。ここまでくれば、すぐわかることだが、この経験談には演奏会の主催者およびその意を帯して入場料を受け取る係員の姿が欠けているのである。交換当事者・経済行動主体に即して考えられる状況は、こうである。主催者は一定の貨幣額の入場料を設定し、現金不足の聴衆に家畜や果物での現物代納を認めたに過ぎないのである。ゼリー嬢は、「演奏会売上代金の３分の１を受け取る」約束を主催者との間で結んだのである。本来ならば、主催者が現物代納として受け取った家畜や果物を島外の市場で販売して、「５曲程度を歌う報酬としては十分のもの」つまり4000フランを支払うべきところである。交換当事者・経済行動主体に即して考察する観点を欠いたジェヴォンズは、物々交換の状況を十分に明示し得たと錯覚して、上記以上には具体像を描いていないのであるが、冷静に状況を観察すれば、これは貨幣使用経済を前提した上で行われた現物代納の事例に過ぎないのである。

(12) 新古典派物々交換論の弱点、その三。

あいまいな場面設定と行動主体想定によって物々交換行為に隠された可能性を否定したサムエルソンは、独立の私的所有者間に想定される物々交換を最早検討の対象としないのである。

その弱点を補正するために、「りんごをもっていて木の実を欲する」人が「ちょうど逆の立場の人、すなわち木の実を売ってりんごを買いたいと思う人を見つける」という形で、共同体に関わることなく、独立の私的所有者間で行われると想定される物々交換を検討してみる。

そのような前提で設定される物々交換は、次のような直接的交換の形態を以て行われる。Ａが所有するＡ'財貨とＢが所有するＢ'財貨という具合に二所有者と二財貨の対等な位置関係が前提される。その状況において、一方でＡがＢに対してＡ'財貨を提供してＢ'財貨との交換を要求し、他方でＢがＡに対してＢ'財貨を提供してＡ'財貨との交換を要求する。両者の合意が成立すれば、Ａ'財貨がＢに渡されＢ'財貨がＡに渡される過程を経て、この直接的交換は完了する。ここで直接的交換が完了するためには、両者の提供財貨と要求財貨の合致、いわゆる「欲求の二重の偶然的一致」(double coincidence of wants) が前提条件をなすわけであるが、サムエルソンは「『欲求の二重の偶然的一致』と呼ばれる事態は、きわめてありそうもない」と、単純にその存在を否定し去り、それ以上の検討を加えていない。一方において物々交換という形態を設定しながら、他方においてその成立を否定しているわけである。このような論理展開、あるいはそこに帰着する思考態度は、物々交換の場面で展開される人間および財貨の相互関係への

考察の芽を摘み取ってしまうもので、学問的に生産的なものとは言えないであろう。

サムエルソンにとっては、直接的交換にあっては貨幣は登場せず、したがって「交換手段」機能は問題となり得ないと言うことかも知れない。が、果たしてそうか。物々交換を求める二人の所有者の間にどのような人間関係が展開されるか、対置される二つの財貨の間に何らかの変容が生じているのではないかという問題は、経済学が検討の対象に取り上げるに値するものである。直接的交換を考察対象として採り上げるためには、何よりもまず「欲求の二重の偶然的一致（double coincidence of wants）の罠」を撤去する必要がある。「欲求の二重の偶然的一致」がなければ何事も始まらないという発想に陥ってはならないのである。「欲求の二重の偶然的一致」が求められるのは最終段階であって、それ以前の段階における「欲求」の発現の場面、交換要求の場面において、人間と財貨の関係に変化が生まれることはありうるわけで、そういう場面に照明が当てられなければならないのである。

この種の交換要求・欲求発現に伴う人間関係の変化、人間・財貨関係の変化について、マルクスは『資本論』第1巻第1章「商品」第3節「価値形態または交換価値」および第2章「交換過程」で検討を試みている[19]。そこでの検討結果に示唆を得て、冷静に考慮するならば、最低限次の二つの論点は逸することができないものとして浮上するはずである。

一つには、「AがBに対してA'財貨を提供してB'財貨との交換を要求し、BがAに対してB'財貨を提供してA'財貨との交換を要求する」過程において、AにとってのA'財貨、BにとってのB'財貨は、通常の財貨とは異なる性質を帯びてくるということである。生産手段として、あるいは消費手段（＝生活資料）としてその所有者によって使用されるのではなく、非所有者である他人によって使用されるために「販売を予定された物品すなわち商品」（ein zum Verkauf bestimmter Artikel, eine Ware）（an article destined to be sold, a commodity）となっているのである[20]。交換に提供され販売を予定された財貨は、もはや単なる財貨ではありえず、商品として他人に販売されることを第一の目的とするものに変化している。こうして、AにとってA'財貨は商品形態をとり、Bに対してB'財貨は商品形態をとることになっている。売れなければ自分で消費すればよいというわけには行かなくなっている。

この点は、マルクスの場合、極めて明確である。『資本論』は、その第1章第1節「商品の二要因－使用価値と価値（価値実体・価値量）」をこう書き出している。「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現れ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現れる。したがってわれわれの研究は商品の分析から始まる」[21]。この点が、サムエルソンの場合、極めて曖昧である。他人への販売を予定された財貨つまり商品なのか、自分で生産手段として、あるいは生活資料として使用を目的とした財貨なのか、自覚的な説明はなされないままである。

19）Karl Marx; ***Das Kapital,*** Bd.1.［***Karl Marx Friedrich Engels Werke,***Bd.23,1962］S.62-85, S.99-108. 岡崎次郎訳『資本論』国民文庫版、第1分冊、92-133頁、155-170頁。

20）***A.a.O.,***S.201. 前掲書326頁。

21）***A.a.O.,***S.49. 前掲書71頁。

二つには、「AがBに対してA'商品を提供してB'商品との交換を要求する」という行動に対して、Bが望むならばB'商品を提供してA'商品を獲得できることになる。ここでは、商品所有者BにおいてB'商品はA'商品に対する「購買手段」として機能しうることになり、A'商品はB'商品の等価物と見なされることとなるのである。その逆の場面つまり「BがAに対してB'商品を提供してA'商品との交換を要求する」行動に対しては、対称的にAが望むならばA'商品を提供してB'商品を獲得できることになり、商品所有者AにおいてA'商品がB'商品に対する「購買手段」として機能し、B'商品がA'商品の等価物と見なされることになる。ここでの「購買手段」は、後述する貨幣のそれとは異なり、交換を求めてきた相手という限定的範囲においてしか機能し得ないのであるが、その機能の性質に着目すれば貨幣の萌芽的存在と認識し得るものである。

ここで、「購買手段」概念に留意しておきたい。「AがBに対してA'商品を提供してB'商品との交換を要求する」という行動において、Aは「交換を要求」しながら自らの力で「交換を実現」できる立場にはない。それに対して「交換を要求」された側のBは、B'商品を提供してA'商品を獲得できる、つまり「交換を実現」できる立場を与えられたことになる。積極的能動的に「交換要求」を働きかけた側には「交換実現」の保証はないのに対して、消極的受動的に「交換要求」を受けた側に望むならば「交換実現」を可能とし、不満であれば「交換実現」を拒否する決定力が生ずるのである。したがって、交換の実現は、単純に両者の対等平等の立場における合意に基づくとは言い得ないのである。「交換実現」の主導権は、「交換要求」を受けた側（上例ではB）にあり、BがB'商品を以てA'商品を「購買」することによって、その裏面としてA'商品が「販売」されることになり、それらの結果としてA'商品とB'商品の「交換」がなされるわけである。こうした過程の特質を考慮すれば、＜商品所有者BにおいてB'商品はA'商品に対する「購買手段」として機能しうることになる＞という規定の適切さが了解されるはずである。

(13) 新古典派貨幣進化論の弱点。

交換の媒介物としての貨幣について、サムエルソン、スティグリッツ、マンキュウと、三者足並みを揃えて、商品貨幣から紙幣を経て銀行貨幣に至るという貨幣進化論を述べていたことは、既に見た通りである。このような新古典派流の理解にしたがえば、信用貨幣はもちろんのこと、紙幣さえも近代社会の産物と考えられるかも知れない。しかし、必ずしもそうとは言えない事実が存在すること、つまり、信用貨幣や紙幣は古代世界においても使用されていたことに注意を払っておきたい。しかも信用貨幣や紙幣の使用は、「金属貨幣流通の途上で隘路にさしかかった経済」にとって「出口」としての意味を持っていたのであり、したがって金属貨幣に代わる紙幣や信用貨幣の使用には、単純に進歩とばかりは評価できない側面が潜んでいたと考えられるのである。

その種の歴史的事例を的確に提示するのは、フェルナン・ブローデル（Fernand Braudel）である。「人々が文字を書けるようになり、じゃらじゃら鳴って秤を傾けさせる硬貨を操るようになるとすぐ、彼らは硬貨の代わりに、文書・紙幣・約束・指図を使い始めたのだった。西暦紀元前二十世紀のバビロンでは、市場の商人と銀行家の間で紙幣や小切手がやりとりされていた

が、その考案の巧みなことは近代性を誇張するまでもなく感嘆に値した。ギリシャやヘレニズム時代のエジプトでも同様の技巧が用いられた。」「古代ローマでは当座預金が行われ、銀出納帳簿の借方と貸方の記載法がなじみのものとなっていた。最後に、イスラム圏商人たちはといえば、モスレムか否かを問わず、信用用具のすべて――為替手形・約束手形・信用状・紙幣・小切手を利用していた。」「これらの遠い昔の前例を知っていれば、西洋の考案について素朴な驚嘆の声を発せずにすむはずである。すなわち西洋は、これら往昔の証券を再発見したのである。アメリカ発見と同じく、実は発見ではなかったのである。実際、金属貨幣流通の途上で隘路にさしかかった経済はすべて、ほとんど論理的に、その本性、その運動の方向に即しているかのように、自ずからかなり急速に信用用具のうちに出口を求めることになった。すなわちこれらの証券は、それぞれの経済に課された拘束のなかから、また同様に、それぞれの不完全性のなかから湧き出てきたのである」。[22]

サムエルソン等が、商品貨幣から（不換）紙幣への変遷を「進歩」と見る視点を示しているのに対して、ブローデルにおいては、「旧機軸からの意に添わぬ撤退」として、困り果てた結果としての窮余の一策という側面を強調していることに、留意が必要である。実際のところ、十九世紀から二十世紀にかけての貨幣制度を概観すれば、金本位制度（及びそれに基づく兌換紙幣制度）から法定不換紙幣制度（いわゆる管理通貨制度）への移行は、経済的恐慌とそれに続く不況からの脱出のために、「旧機軸からの意に添わぬ撤退」として実施されたと考えられる側面が、多分に存在するのである。

ブローデルが、新古典派流の貨幣進化論に対して、その弱点を突く歴史的事例を提示しているとすれば、それに一世紀以上遡る時点で、新古典派流の貨幣進化論に対して、その弱点を明らかにする理論的示唆を提供したのは、マルクスである。ここで、着目すべきマルクスの理論的示唆は、二つの点に関わる。

第一は、商品経済（市場経済）が浸透した社会と、それがなお浸透していない共同体社会の区別と関連についての理解である。マルクスは、『資本論』第1巻第2章「交換過程」において、「商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で始まる。しかし、物がひとたび対外的共同生活で商品になれば、それは反作用的に内部的共同生活でも商品になる」と言い、そのとき問題の共同体は「古代インドの共同体であろうとインカ国その他であろうと」問うところでないという認識を示している。つまり、古代社会においても部分的には商品経済が浸透した社会とそれが浸透していない共同体社会との併存があり得たことを理解しているわけである。[23]

第二は、商品経済の展開と貨幣発生の関連についての理解である。商品所有者の商品販売要求に伴う人間関係の変化、人間・商品関係の変化について、マルクスが、『資本論』第1巻第1章「商品」第3節「価値形態または交換価値」および第2章「交換過程」で検討を試みていること、そういう商品販売要求の積み重なりのなかから「購買手段」としての萌芽的貨幣形態が

22） Fernand Braudel, ***Les Structures du quotidien, Civilisation matérielle, Economie et Capitalisme, xve-xviiie Siecle,*** tome 1, 1979, p.415. 村上光彦訳『日常性の構造2－物質文明・経済・資本主義、15-18世紀』みすず書房、1985年、199頁。

23） Marx,***a.a.O.,***S.102. 前掲書161頁。

発生すること、その貨幣形態にあっては商品販売要求に応えうる「購買手段」としての貨幣機能が第一義的であることについては、既に(12)において若干の説明を施したところである。第3章「貨幣または商品流通」に進むと、購買手段機能を出発点として、流通手段機能、蓄蔵手段機能、支払手段機能が発揮される様相が説明される。そこでは、説明の焦点は「機能」であって、その「機能」を担う「素材」は単一に限定されないのが通例であるという貨幣理解が、次のような形で示されている。流通手段に関して。「貨幣通流そのものが、鋳貨の実質内容をその名目内容から分離し、その金属定在をその機能定在から分離するとき、貨幣通流は、金属貨幣がその鋳貨機能においては、異なる素材から成っている章標つまり象徴によって置き替えられる可能性を、潜在的に含んでいる」。[24] 支払手段に関して。「信用貨幣は、支払手段としての貨幣機能から直接に発生するものであって、それは売られた商品に対する債務証明書そのものが、さらに債権の移転のために流通することによって発生するのである。他方、信用制度が拡大されれば、支払手段としての貨幣機能も拡大される。このような支払手段として、貨幣は特有の存在諸形態をうけとり、この形態では大口商取引の部面を住みかとするのであり、他方金銀鋳貨は主として小口取引の部面に追い帰されるのである」。マルクスが『銀行法特別委員会報告書』から引いた1856年のロンドン最大商社の年間収支を見ると、「日付後支払手形」41.9%、「一覧払銀行小切手」51.1%、「イングランド銀行券」4.5%、「地方銀行券」0.5%、「金貨」1.9%、「銀貨、銅貨」0.1%という構成である。現金の比率が小さく、信用貨幣の比率が大きいことが一目瞭然である。[25]

この二点の理論的示唆を踏まえるならば、次の二つの事項が、十分の根拠を以て受容されるはずである。一つには、古代と近代とを問わず、商品経済の展開領域には踵を接して貨幣使用が見られるようになること、二つには、貨幣登場後においては、金属貨幣と紙幣と信用貨幣の同時的存在（synchrony）は特別に奇異な事象ではなく、通例として見受けられるものであること。

こうして、サムエルソン等の新古典派に共有されている貨幣進化論、一つには、古い物々交換の時代から新しい貨幣使用の時代へと進化するという見方、二つには、商品貨幣（とくに金属貨幣）から紙幣を経て銀行貨幣・信用貨幣へと進化するという見方、つまり単線的な通時的変化（diachrony）の相において構築された貨幣進化観念が、事実に反する虚構にすぎないことが判明するのである。

(14) 新古典派の狭義の貨幣機能論、すなわち交換手段（交換の媒介物）機能を中軸として計算単位（勘定の単位）機能と価値貯蔵手段（価値の蓄え）機能の二つを付け加えた三種類の貨幣機能それぞれについての説明に検討を加える段階である。

(15) 新古典派貨幣機能論の弱点、その一。

サムエルソンは、貨幣をまず「交換手段」

24) Marx, *a.a.O.*,S.140. 前掲書222頁。

25) *A.a.O.*,S.153-154. 前掲書245-246頁。
なお、第3章「貨幣または商品流通」において、マルクスは文字通りには「価値尺度」を（「購買手段」ではなく）出発点としており、かつそこにおける「価値尺度」機能の理解については、マルクス経済学界でその当否を巡る論争が続いている。ここでは、貨幣機能の論理的関連の整合性の観点から「購買手段」という概念・表現を選択する。踏み込んだ検討は、次稿の「マルクスの貨幣機能論」の節で行うこととする。

(medium of exchange) 機能において理解しているのであるが、「迅速かつ容易な取引」を可能にするものとしての「交換手段」の機能を説明することで、貨幣の特質を明確にし得たか否かという問題を取りあげる。貨幣の「交換手段」機能について、サムエルソンはこう説明している。「いったん経済がきわめて原始的な段階をこえて発展するようになると、人びとは一つの財貨を直接に他の財貨と交換することはしない。むしろ、ある財貨を貨幣に対して売り、そのうえで、貨幣を使って希望する財貨を買うのである。……一つの取引のかわりに二つの取引をすることになるのである。」「幅広く取引をするような社会では、物々交換 (barter) がはらむ圧倒的なハンデキャップを到底克服できなかったために、広く一般に受け容れられる交換手段 (medium of exchange) である貨幣が現れてきて、農民は裁縫師からズボンを買い、裁縫師は靴職人から靴を買い、靴職人は農民から革材料を買うことができるようにしたのである」。「迅速かつ容易な取引を可能にするがゆえに貨幣は有用なのである。」

この説明から、サムエルソンが商品と貨幣との相違について、したがって商品に対して貨幣が有する特質について、明確に認識していないことが読みとれる。サムエルソンはさりげなく「ある財貨を貨幣に対して売り」と表現しているが、商品・財貨（所有者）側からは貨幣に対する交換要求は可能であるが、自らの力で交換を実現できる＝販売できる保証はないのである。逆に貨幣（所有者）側はその商品・財貨に対する欲求（必要）があるならば、交換要求にとどまらず交換を実現できる＝購買できる力を有しているわけである。したがって「そのうえで、貨幣を使って希望する財貨を買う」ことは、確実に可能なのである。こういう商品と貨幣との対極的な力関係について、明確に認識し的確な表現を与える点で、サムエルソンには欠けるところがある。

その点では、マルクスは、実に明確に、貨幣は「直接的一般的交換可能性の形態」[26] であって、いつでもどこでも何でも商品を購買できる力を持つのに対して、商品の販売は困難で絶えず売れ残る危険性に悩み「命がけの飛躍」を強いられることを強調している[27]。その観点をふまえて、貨幣を用いた取引を観察してみよう。直接的交換と異なり、貨幣を用いた取引には、少なくとも経済行動主体が3人登場している。Aが所有する貨幣でBからその所有するB'商品を買い、次にこの過程を経て獲得した貨幣で以てBがCからその所有するC'商品を買うのである。貨幣による購買の結果として、3人の行動主体の間でB'商品がBからAに移動し、C'商品がCからBに移転されているのである。こういう次第で、「一つの取引のかわりに二つの取引をすることになる」。この「二つの取引」過程そのものを行動主体に即してみると、第一の取引を貨幣所有者Aの貨幣と商品所有者Bの商品B'の「交換」、第二の取引を貨幣所有者Bの貨幣と商品所有者Cの商品C'の「交換」と単純に表現できないことがわかる。貨幣と商品という対等平等の立場の二者間の「交換」とは言えなくなっているのである。「ある商品・財貨を貨幣に対して売る」ことは必ずしも実現するとは限らず不確実性が絶えず残るのである。逆に「貨幣を使って希望する商品・財貨を買う」ことは実現するのが通例であって確実性が極めて高いの

26) Marx, *a.a.O.*,S.84. 前掲書131頁。
27) *A.a.O.*,S.120. 前掲書191頁。

である。このような事情を勘案すれば、貨幣所有者の貨幣と商品所有者の商品との「交換」過程は、正確には貨幣による商品の購買過程であり、その裏面として商品の販売過程が実現しているわけである。したがって貨幣は直接的には購買手段として機能しているのであり、商品の販売は貨幣所有者の欲求が前提されて初めて実現されるものとしてある。ここで「二つの取引」過程の結果として生じたものは、＜B'商品→貨幣→C'商品＞という流れであって、商品同士の交換ではない。交換という視点で見ると、商品所有者Bが商品B'を手放して商品C'を入手するという形で、ある行動主体に関して間接的交換が行われているのである。こうして貨幣所有者に即してみると、貨幣の機能としては、「購買手段」機能が挙げられねばならないと言えよう。貨幣が購買手段として機能した社会的結果として＜商品→貨幣→商品＞という間接的交換が実現され、貨幣は「交換手段」機能を果たし得ることになるのである。「購買手段」としての貨幣が機能した結果として、商品を生産の場から市場を経由して消費の場へと送り込む機能に着目して、マルクスは「流通手段」としての貨幣の規定を与えている。

(16) 新古典派貨幣機能論の弱点、その二。

サムエルソンは、貨幣を何よりもまず「交換手段」として理解しながら、同時に貨幣を「支払手段（means of payment)」として説明したり、貨幣の基本的特質を「財貨やサービスを購入するさいの支払として受け入れられる（accepted as payment for buying)ということ」として把握しており、交換手段と支払手段の異同を巡って、疑問の余地を残している。前述のように、ここでの「交換手段」は、正しくは「購買手段」とすべきものであるので、問題は「購買手段」と「支払手段」の異同ということになる。Aが所有するある商品（財貨・サービス）と、Bが所有する貨幣という具合に、商品（財貨・サービス）所有者と貨幣所有者の存在が前提されて、貨幣所有者の貨幣によって商品（財貨・サービス）所有者から商品（財貨・サービス）が購入される過程が想定されたうえで、「財貨やサービスを購入するさいの支払として受け入れられるということ」に着目して「支払手段」という表現が生まれたものと考えられる。しかしながら、この表現においては、「受け入れられる」と受動態になっている点に反映されるように、商品（財貨・サービス）が能動的であって、貨幣は受動的であるというように、事態が転倒した形で把握されており、貨幣の特質を積極的に評価し表現し得ていないのである。貨幣の機能を積極的に表現するためには、それが購買手段として、いかなる商品（財貨・サービス）であれ購入しうることを正しく捉えなければならないのである。

貨幣の「支払手段」機能は、先に（13）で触れたように、マルクスも着目したところである。彼は「商品の譲渡を商品価格の実現から時間的に分離するような事情」を取り上げ、貨幣の新たな機能についてこう説明する。「買い手は、その代価を支払う前に、それを買うわけである。一方の商品所持者は、現にある商品を売り、他方は、貨幣の単なる代表者として、または将来の貨幣の代表者として、買うわけである。売り手は債権者となり、買い手は債務者となる。ここでは、貨幣もまた別の一機能を受け取るのである。貨幣は支払手段になる」。[28]マルクスは債務の決済手段として価値を一方的に移転

28) Marx, *a.a.O.*,S.149. 前掲書238頁。

する機能に着目して、支払手段を購買手段と異なるものとして位置づけたのである。

(17) 新古典派貨幣機能論の弱点、その三。

「勘定の単位（計算単位）」の機能として、サムエルソンは、一方では「財貨およびサービスの現在ならびに将来の価格をドルで表現する（denominate the prices of goods and services, present and future, in terms of dollars）」ことを挙げる。そして「共通の勘定単位を使うことは経済生活を大いに単純化する」というところにその有用性を認める。他方では、「明白な価格の決定（unambiguous determinations of the price）」を可能にすることを貨幣の「勘定の単位（計算単位）」の機能として強調する。「価格をドルで表現する」ことと「明白な価格の決定」を同等のものとして、サムエルソンは理解しているわけである。しかし、この理解を正確ではない。商品の価格をドルで表現することは、売り手の行為である。第一に、（1971年の金・ドル交換制停止前の米国を例にとると）金1/35オンス＝1ドル形で価格の度量標準（standard of value）が法定されており、第二に、商品所有者・売り手が「靴1足＝30ドル」と値付けを行うのである。こうした形で、商品に価格を設定するにあたっては、貨幣の出動を必要としないわけであって、価格表現を貨幣の機能ということはできない。それに対して「明白な価格の決定」は、先にも述べたように貨幣所有者・買い手の行為である。商品所有者が自己の商品に設定した価格に対して、それを欲する貨幣所有者が貨幣を購買手段として機能させる。貨幣の出動によって商品が購買され、その裏面として、商品が販売され、そこにおいて「価格の決定」が実現される。貨幣によって購買されないとき、商品の価格は下方修正されて、購買を誘発する行動へ移る。そういうことを繰り返して、各商品について一定の価格（価値）水準が形成される。「価値尺度」（measure of value）機能というのは、このように貨幣の「購買手段」機能の別の表現だと考えられる。このような事情に不案内なままに、「価格の度量標準」と「価値尺度」とを混合したことが、サムエルソンの説明の弱点だと言わねばならない。

(18) 新古典派貨幣機能論の弱点、その四。

「貨幣は時には価値貯蔵手段として使われる」という説明は、余りにも当然のことで、そこには何の弱点もないかのように思われるかも知れない。「価値の蓄え（価値貯蔵手段）」機能を巡るサムエルソンの説明には、特別の誤りは見いだせない、と言うべきかも知れない。しかし、マルクスが「貨幣の量的な制限と質的な無制限との矛盾」に着目し、そこから「貨幣蓄蔵の衝動はその本性上無際限である」と指摘したことと照合するとき、やはり弱点の存在に気づかざるを得ないのである。「質的には、貨幣は無制限である。すなわち、物質的な富の一般的代表者である。貨幣は、どんな商品にも直接に転換されうるからである。しかし、同時に、どの現実の貨幣額も、量的に制限されており、したがってまた、ただ効力を制限された購買手段でしかない。このような貨幣の量的な制限と質的な無制限との矛盾は、貨幣蓄蔵者を絶えず蓄積のシシュフォス的労働へと追い返す。彼は、いくら新たな征服によって国土を広げても国境をなくすことのできない世界征服者のようなものである」[29]。貨幣を商品を購買する手段と理解する観点に立てば、貨幣が貯蔵されるとしても、それは本来の富である商品を将来購買するために一

29) Marx, *a.a.O.*,S.147. 前掲書234-235頁。

時的に保有されているに過ぎない。これに対して、無際限の「蓄蔵衝動」に関連してマルクスが指摘するのは、貨幣は将来の購買の準備としてだけではなく、それ自体が富として自己目的的に蓄蔵されることになる、という性質である。より多くの貨幣へと動く貨幣の運動——それは、自己増殖体としての資本への道につながるものでもある。ただ価値を貯蔵する手段に留まるのでなく、より多くの価値の獲得を目指した動きをも孕んだものとして、貨幣を理解する——マルクスの貨幣蓄蔵論はそういう重層構造になっている。現行版のサムエルソンの価値貯蔵手段論には、資本への道を目指す貨幣の側面が欠けていると言えよう。初版においては、サムエルソンは、前に（5）において引用したようにこう言っている。「通常の時には、人は貯蓄を貯蓄勘定に預金したり、証券や株式に投資して、収益を得られるのだから、貨幣を『価値貯蔵手段』として役立てようとするのは正常とは言えない」。ここには、確かに、より多くの貨幣を目指すものとして貨幣を把握する観点が認められるのである。この点では、サムエルソンは書物の版を重ねて、内容上は後退しているのである。

（16）現在の新古典派の経済学において、物々交換の不便を克服するものとして貨幣が登場し、商品貨幣から紙幣を経て銀行貨幣へと進化の道をたどるものとして説明されていること、貨幣が「交換手段」(medium of exchange)、「計算単位」(unit of account)、「価値貯蔵手段」(store of value) として理解されていること、それぞれの理解において弱点が存在することに言及してきた。その言及を総括する意味で、新古典派の始祖・マーシャルの貨幣機能論を回顧してみたい。ここで彼の貨幣機能論と呼ぶのは、1923年刊行の論文集『貨幣信用と商業（Money Credit and Commerce)』に収録されている第1篇第1章「貨幣の機能（Functions of Money)」およびそれに付された付録A「貨幣の発達についての覚書（Notes on The Evolution of Money)」である[30)]。

第一に、マーシャルの貨幣機能論においては、物々交換（barter）が立ち入った検討の対象になっている。しかも「異なる諸個人間の関係、諸階級間の関係が慣習と権力によって大幅に規制されていた時代（times, when the relations between differrent individuals and different classes were largely regulated by custom and by force)」つまり共同体的規制の強い時代の物々交換と、「個人の所有権が家族、村落、部族のそれから明瞭かつ十分に分離された（the rights of possession of an individual had been clearly and fully marked off from those of the family, or village, or tribe)」時代の独立した個人間の物々交換（trade by barter between two individuals）が区別されている。その点で、サムエルソン、スティグリッツ、マンキューの貨幣機能論にない深みのある議論となっている。そうした議論のなかに、次のような興味深い指摘も見いだされる。「より一般的に言って、ある財貨が任意の場所で、他の財貨との交換に用いられることが確実であると認められるようになると、間もなくその財貨が原始的な貨幣になった。そして価値は、それを以て表現されるようになるであろう。」(To speak more generally, as soon as a thing became recognized as sure to be available in exchange for other things in any place, it became a primitive sort of money, and

30）Marshall ; *op.cit.,* pp.12-20. pp.264-272.この個所からのマーシャルに関する引用については、重要個所には英語原文を添えているので、出典の表示は行わない。

values would come to be expressed in terms of it.)。経済行動主体の交換要求関係から貨幣形態の導出を説くマルクスの価値形態論に一脈通じる見地を窺うことができる。

第二に、マーシャルの貨幣機能論においては、サムエルソン、スティグリッツ、マンキューのそれのように三種類に整理されるという形での制度化は進んでいない。散発的に貨幣の種々の機能を検討するという形式の叙述になっている。しかし、その叙述のなかに実質的には三種類の機能を含んでいると同時に、それを超えて「購買手段」機能を指摘したり、マルクス的意味における「支払手段」機能に着目する側面を有している。また、貨幣によって購買される対象についても、現代版新古典派のように「財貨とサービス（goods and services)」へと統一されるという形で制度化されてはおらず、「商品とサービス（commodities and services)」という表現も見受けられるのである。

（甲）「『貨幣』という言葉と『通貨』という言葉はときには狭くときには広く用いられる。それらは何よりもまず、たがいに未知の人々の間でさえ手から手へと移動して、表面に明記された額の一般的購買力に対する支配を移転する、交換手段から成っている。」

(The terms "money" and "currency" are used sometimes narrowly, sometimes broadly. They consist, in the first place, of those media of exchange, which pass freely from hand to hand, even among persons who are strangers to one another; and thus transfer the command of amounts of general purchasing power, which are set out in clear type on their faces.)

（乙）「普遍的とまでは言えないにしても一般的には次のような見解の一致がある。すなわち、反対のことを示唆する言葉がない限り、『貨幣』は『通貨』と同じ意味に用いられ、したがって、（任意の時と所において）疑われることなく、あるいは特別の検査を受けることなく、商品とサービスに対する購買手段として、あるいは商業上の債務の支払手段として、一般に流通する全てのものから成る。」

(There is a general, though not universal agreement that, when nothing is implied to the contrary "money" is to be taken to be convertible with "currency", and therefore to consist of all those things which are (at any time and place) generally "current", without doubt or special inquiry, as means of purchasing commodities and services, and of defraying commercial obligations)

（丙）「貨幣の主要な機能は二つの項目に分かれる。第一に、貨幣は始まるとほとんど同時に終わる取引のための交換手段である。それは『通貨』であって、一目でその価値が読みとれるので、財布に入れて持ち運ばれ、手から手へと『流通する』物体である。貨幣のこの機能は、金と銀とによって、またそれらに基づいて発行される紙幣によって立派に達成されるのである。貨幣の第二の機能は、価値の度量標準として、すなわち延期された支払の基準として働くことである。すなわちその支払が、相当の期間にわたる契約や商業上の債務を弁済するのに十分な、一般的購買力の量を示すことである。そして、この目的のためには、価値の安定が不可欠の条件である。」

(The chief functions of money fall under two heads. Money is, firstly, a medium of exchange for bargains that are completed almost as soon as they are begun; it is a "currency" ; it is a material thing carried in purses, and "current" from hand to hand, because

its value can be read at a glance. This first function of money is admirably discharged by gold and silver and paper based on them. The second function of money is to act as a standard of value, or standard for deferred payments—that is, to indicate the amount of general purchasing power, the payment of which is sufficient to discharge a contract, or other commercial obligation, that extends over a considerable period of time: and for this purpose stability of value is the one essencial condition.)

（丁）「交換手段は、直接の取引に対する価値の共通要素の具体的形態である。また価値の貯蔵機能は、延期された支払に対する価値の基準を正確に定めることのできる具体的物体によって、最も効率的に果たされる。具体と抽象という二つの組合せは、短期取引と長期取引とに関連して、相互に対応していると見なしてよい。こうして貨幣は多かれ少なかれこれら四つの機能に近似した機能を果たしているのである。」

(It may be noted that a medium of exchange is the concrete form of a common denominator of value for immediate business; and the function of a store of value is most efficiently performed by a concrete thing, which sets a good standard of value for deferred payments: these two pairs, concrete and abstract, may be regarded as the counterparts of one another in regard to short-period and long-period transactions respectively. Money has served minor functions, more or less akin to these four.)

第三に、マーシャルの貨幣機能論においては、「貨幣という道具が冷酷に作用した（money instrument worked harshly in some directions)」側面が見落とされずに着目されていた。この点は、小稿の「地域通貨への問題関心」の節において、既に強調したことである。ただ、マーシャルにあっては、「貨幣の不安定化作用」は、過去形で語られるだけであった。十九世紀英国は、1825年、37年、47年、57年、66年と幾度も恐慌を経験している。最好況期から恐慌期にかけて、投機の盛行とその破綻が生じていた。この過程に着目すれば、貨幣の不安定化作用を現在形として語って良いはずであるが、現在形においては安定化作用しか語られていない。その不安定化作用が現在形においてより鋭い形で表面化していることが、今日の時点では重要な事項であろう。そのことを補足したうえで、翻って言えば、過去形においてであれ「貨幣の不安定化作用」に留意したマーシャルは、やはり具眼の士であったといえよう。物々交換の不便に対して貨幣使用の利便性をひたすら賞賛する現在の新古典派の貨幣機能論は、この重要な論点を逸していると言わねばならない。

〔九州大学大学院経済学研究院教授〕